

# 令和2年度 京都府立東稜高等学校 学校経営計画

令和2年4月1日

## I 教育目標

「質の高い学力」と「信頼される人間力」を育み、社会に貢献できる人間を育成する。

## II 学校経営方針（中期経営目標）

「真の自己実現にTRY」をスローガンに、教育目標の具現化に向けたキャリア教育の推進を継続し、生徒の力が「伸びる学校」・生徒の力を「伸ばす学校」を目指す。本府「教育振興プラン」及び「学校教育の重点」を踏まえ、学習指導要領に即して創意・工夫した教育課程を編成し、日々の教育活動の充実に努め、希望進路の実現と心豊かにたくましく生きる人間の育成を図る。

- 1 地域・生徒・保護者に信頼され、地域と密着し地域を教育で支える学校として様々な教育活動を展開する。
- 2 キャリア教育の推進を図りながら、前向きな社会生活を営むための職業観を醸成するとともに、生きる力を育み、社会に貢献できる人間力を育成する。
- 3 一人ひとりを大切にしながら厳しくも愛情のある生徒指導を軸に基本的な生活習慣を確立し、「自学・自習」の習慣を定着させ、個に応じた希望進路の実現を図る。

## III 本年度学校経営の重点目標（短期経営目標）

### 1 希望進路の実現に向けた学力の充実

- (1) 希望進路の実現に向けて、授業を大切に作る姿勢と授業規律の確保に努め、個々の課題に応じた丁寧な指導を行う。
- (2) セーフティネットプログラムをはじめとする基礎学力の定着と、希望進路の実現に向けたチャレンジ講座等による学力の伸長を図る。
- (3) ICTの活用や研修への積極的な参加等を通して、わかりやすい授業づくりのための工夫と学習評価の改善を進める。

### 2 生活指導の充実

- (1) 挨拶や身だしなみ等の基本的な生活習慣の確立に向けて、学校、家庭、地域が協働して指導を行う。
- (2) 生徒会や部、ボランティア等の活動をとおして自己有用感を高めさせるとともに、生徒を主体とした魅力ある学校行事を展開する。
- (3) SNS、薬物乱用防止、交通安全等の指導により規範意識を醸成し、主体的に行動できる態度を育てる。

### 3 人権教育の推進

あらゆる場面での一人一人を大切にする指導を通じて、自他の生命と人権を尊重する意識や態度を身に付けさせる。

### 4 キャリア教育の推進

自らの適性の理解と、将来を見据えたキャリア意識の高揚をねらいとする取組を進める。また、本校のキャリア教育を牽引するキャリアコースの各クラスの特徴をより明確化し、クラス間や異学年の連携により職業観の醸成、希望進路の実現につなげる。また、キャリアコースの取組を積極的に他のコースに展開し、キャリア意識の高揚に役立てる。

### 5 その他

- (1) ホームページやメール等を活用し、本校の特徴や教育活動の様子、緊急時の対応等の情報を積極的に発信する。
- (2) ペーパーレス、会議などの精選、ICTの積極的活用により、教職員の働き方改革を進める。

## IV 前年度の成果と課題

- 1 「学びの時間」などによる学力の定着をねらいとする取組を行うことができた。今年度は、年度当初から取組を行う必要がある。
- 2 学力伸長の取組や個々の進路希望に応じた指導により、進路実現につなげることができた。今後は、家庭学習も含めた学習習慣の定着が課題である。
- 3 キャリアコースにおいて、多くの外部組織と連携することができた。今後は、学んだ内容を生徒自らが発信できる機会をさらに増やしていかなければならない。
- 4 基本的な生活習慣、SNS、インターネット、薬物乱用防止、交通安全等の指導や、自他の人権を尊重する意識、態度を身に付ける指導を継続する。
- 5 中学校訪問、学校説明会、ホームページ等を通じて、情報発信を行った。また、臨時休業等の連絡をホームページやメール等により行うことができた。
- 6 支援を必要とする生徒に対して支援を行うことができた。今年度は、より細やかに情報を収集し、適切な支援につなげる体制の構築が必要である。
- 7 「高校生のための学びの基礎診断」「英語4技能試験」等を有効に活用しながら、高大接続改革に対応できる指導を進める必要がある。
- 8 「総合的な探究の時間」を教科横断的、系統的に実施する。また、令和4年度の新学習指導要領の実施に向けた教育課程の検討を行う。

令和2年度 京都府立東稜高等学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

評価領域	重点目標	具体的方策	中間	評価	成果と課題
組織運営	本校の特色ある教育活動を全教職員の共通認識に基づいた取組に落とし込み、実践する。	会議や資料提供によって情報の共有を図り、必要に応じて積極的な意見交流を行う。	B	B	B ・ICTを活用することにより、情報の共有、ペーパーレス化が一定進んだ。今後教職員のICT活用のスキルを一層高める必要がある。 ・計画的に研修会を実施することで、教職員の見識を深めることができた。ただし、研修会の参加状況、事前・事後アンケートの回答率には課題があった。校外研修会についてはWEBを活用し、可能な範囲で積極的に参加した。 ・令和4年度入学生のコース編成や教育課程については、分掌、教科と意見交流を図りつつ計画的に検討し、作成することができた。 ・各指定事業については、担当者を中心に積極的に取り組んだ。
		研修会の開催や校外研修会への積極的な参加により、本校の教育活動を随時点検、確認する。	B	C	
	本校の今後の方向性や新学習指導要領を踏まえ、地域から信頼されるよりよい学校づくりに向けた検討を進める。	令和4年度入学生のコース編成や教育課程を検討する。	B	B	
		各指定事業等を本校の教育活動に位置づけて、効果的な実施を図る。	B	B	
学習指導	基礎学力の定着を図る取組を主導する。	低学力、個別の学習支援が必要な生徒を早期に把握し、計画的・組織的な指導・支援体制により基礎学力の定着を図る。（東稜e-フェイネット・プログラム）	B	B	B ・ステップアップ(1年)により数・英の基礎力定着を図り、学びの時間、基礎学力補充を定期考査前に実施することで、成績下位層への指導を継続的に行った。これらの取組による成果については検証が必要である。 ・東稜スタンダード(1年)による統一評価を行った。また、教科主任会議を通じて評価について検討を重ね、共通の目標値を設定するなど、適正な評価方法に向けて工夫と改善に取り組んだ。 ・総合的な探究の時間(1年)を教科横断型で実施し、異なる2テーマで探究活動の基礎を行うことができた。
		教科担当者会議、教科主任会議を有効に活用し教科と学年・他分掌との連携を深める。	B	B	
	わかりやすい授業づくりのための工夫と各教科の学習評価方法の改善を進める。	総合的な探究の時間を活用し、生徒が主体的に取り組み、学習効果が上がる授業手法を全教科で取り組み、PDCAサイクルを確立させる。	B	C	
		1年生については統一の評価基準のもとで評価を行い、不合理な差異が生じないよう工夫と改善に努める。（東稜スタンダード）	B	B	
キャリア教育	キャリアコースの取組を発展させ、すべての生徒のキャリア意識の高揚を図る取組を実践する。	上級生と下級生が協働して取り組む縦断型学習、キャリア3分野の連携した横断型授業の推進を目指す。	B	B	B 活動が制限される中でも、1年生キャリアコースのキャリア見学会、ライフマネジメント・ライフサポートによる横断型授業の実施など、つながりをつくることができた。学校説明会においては、中学生に向けてキャリア教育への関心が高まる方法を検討していきたい。 総合的な探究の時間では、ICTの環境整備が進む中、タブレットを活用した学習にも積極的に取り組むことができた。
		本校の特色であるキャリアコースの魅力を地域に発信し、連携を深めるだけでなく、中学生への啓発を、学校説明会を通じて行う。	B	B	
	「総合的な探究の時間」を教科横断的、系統的に実施する。	教科の連携をはかった横断的な学習、地域との連携をはかった体験的な学習をとおして、主体的な学びに結びつける。	B	B	
		プレゼンテーション能力や文章表現能力を身につけ、生徒にとっての自己有用感を身につける。	B	B	
人権教育	自他の生命と人権を尊重する意識や態度を身に付ける取組を実践する。	ホームルーム活動や部活動などを通じて、深い信頼関係に基づく人間関係の構築を促す。	B	B	B ・東稜祭や部活動などで活動に制限がある中工夫しながら活動することで生徒間の信頼関係を築くことができた。 ・人権学習や授業を通じて多様性を認め合いながら学校生活を送ることができた。
		授業や人権学習での学びを生かし、正しい人権意識を持つ生徒を育成する。	B	C	

評価領域	重点目標	具体的方策	中間	評価	成果と課題	
生徒指導 特別活動	基本的な生活習慣の確立、規範意識の醸成を図り、主体的に行動できる態度を育成する。	携帯電話預かり指導、身だしなみ指導の件数を減らし、落ち着いて学習に向かえる環境を作り、自律できる力を育む。	B	C	C	文化祭、体育祭では、制限や変更が多い中、「自分達がいまできることを考え、最大限やる」ことを目標に、計画・運営ができたことが最大の成果である。取組を通して、クラスの団結力が深まるとともにリーダーの育成にもつながり、年々達成感を得られた生徒の割合が増えてきている。来年度も引き続き、生徒や地域の特徴を考慮し、生徒を支援することを心がける。課題を抱える生徒に対してはきめ細かい指導を積み重ねる。また、基本的な生活習慣確立に向けての指導を粘り強く行っていきたい。
		当該生徒の理解に努め、「教育支援機能」を有し、個々に合った生徒指導を実践する	B	B		
	自己有用感の高揚を図る取組を進める。	部活動の加入率を上げ、生徒の主体性を伸ばす。	B	C		
		各種行事への取組を通して、クラス・委員会の自治力を高め、リーダーを育成する。行事の後に「やってよかった」・達成感を得られる生徒の割合を増やす。	B	C		
進路指導	キャリア意識を高めて、自らの将来を考えさせる取組を進める。	自らの適性を理解し、説明会等で将来の職業について考えさせる。	B	B	B	コロナ禍でも、補習や説明会、模試等を実施できた。「進路だより」も活用できた。進路について考える機会を保障できたが、生徒自らが判断し、希望進路の実現に向けて具体的に行動できる工夫がさらに必要である。教員同士が情報を共有し、指導にあたることのできた。今後も定期的な教員研修を継続し、生徒を多面的に見守り、東稜チャレンジ講座や進学補習の充実を図っていきたい。
		卒業後のミスマッチのないよう常に情報共有して指導にあたる。	B	B		
	希望進路の実現に向けて、学力伸長を図る取組を主導する。	東稜チャレンジ講座(1.2年)等に積極的に参加させ、学習習慣を身に付け、学力伸長を図る。	B	C		
		進学補習、突破講座、就職講座等、個々に応じて系統的な指導を図り、希望進路実現に向けてきめ細かいサポートをする。	B	B		
健康安全 特別支援	健康に関心を持ち、適切に行動できる知識と態度を身に付けさせる。	健康診断や「生活とからだのアンケート」の実施、感染症に関する情報提供等を通して、生徒一人ひとりが健康の大切さを認識し、自らの健康を管理し改善する能力を育てる。	B	B	B	新型コロナウイルス感染拡大により教育活動が一部制限を受ける中、実施時期や実施形態等を工夫することで、健康診断や救命救急講習会、性教育講演会、「生活とからだのアンケート」等を計画通り実施し、当初のねらいは概ね達成することができた。新型コロナウイルス感染予防に関しては、3密の回避、手指消毒・マスクの着用・換気の奨励および必要な情報提供・全体指導に努めた。また、定期的に教育支援会議を開催し、課題のある生徒の状況把握に努めるとともに、本年度は地域支援センターの活用・連携も試みた。多様な教育ニーズを有する生徒に対して、教職員間の連携を強化し、より具体的かつ有効な支援を今後とも模索していく必要がある。
		救命救急講習会や性教育講演会を実施し、生命尊重、自己や他者を尊重する態度を育むとともに、健康で安全な生活を送り、責任ある行動を実践することができるようにする。	B	B		
	生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じて適切な支援を行う。	定期的に教育支援会議を開き、多様な課題をもつ生徒の状況把握に努めるとともに、学習面での支援では、教務部との連携のもと、体制づくりを行う。	B	B		
		教職員研修やスクールカウンセラーとのコンサルテーションなどを通して、特別支援教育についての教職員の知識・技量を高め、生徒の教育的ニーズに応じた具体的な支援につなげる。	B	B		
学校 図書館	効果的な教育活動の実践に向けて、図書館の機能を最大限に活用できる体制づくりを進める。	学校図書館としての機能をより向上させ、外部の公立図書館との連携も深めながら、利用者の実態に即した利便向上に努める。	B	B	B	・府立図書館等との連携を例年以上に深め、学校図書館機能の充実にも努めた。「総合的な探究の時間」などで、課題解決のための図書館利用が増えた。 ・コロナ禍の中、ブックハンティング、各種ワークショップ、おはよう読書、図書館まつりなどを実践することができた。
		委員会活動の充実を図りながら、イベントの内容を精選し、より深化させる。	B	B		

評価領域	重点目標	具体的方策	中間	評価	成果と課題
施設設備管理	安心・安全で教育効果向上に繋がる施設・設備環境の維持・管理に努める。	週に1回校舎内巡回等を行い、施設の不具合箇所等の早期発見に努める。また、施設・設備の不具合や要望について、各学期ごとに分掌を通じて調査し、次学期でその対応について報告する。	B	B	週1回以上の校内巡視を行い、施設の不具合箇所については早急な対応ができたが、施設に関する調査や要望、それに対する報告ができなかった。
		日常においても、常時報告をしてもらえるように教職員に声をかけるとともに、共有フォルダに様式を置き、修繕要望を入力できるようにする。報告の上だった案件に対しては早急に対応する。	B	B	
修(就)学支援	修(就)学機会保障のための支援策を充実させ、保護者への情報提供を促進する。	在学中や卒業後の経済的不安を軽減し、修(就)学機会の確保を推し進めるため、各種支援制度について、生徒・保護者のもとより教職員にも説明する。	B	B	支援対象者への案内は、丁寧に行うことができ、支援対象生徒の請求漏れもなかった。教職員への周知や制度に対しての説明は、個別にはできたが、全体に対して共通理解するところまではできなかった。
		保護者に対してはホームページやお知らせメールを使って周知する。また、支援対象生徒の請求漏れを防ぐ。	B	B	
学年	【第1学年】高校生としての自覚と目標を持ち、落ち着いた学校生活を送らせる。また、学年、学級指導を計画的に行い、自己と他者の関わりを大切に、互いに協力し合って高め合える学年づくりを目指す。	基本的な生活習慣を確立させる。学習環境の整備、学習習慣の確立を図り、基礎学力を向上させる。	B	B	休校措置から始まり、複数の取組が削減されたものの学年単位で集合する際には、おおむね良好な身だしなみで時間も守れた。日々の授業では若干の不徹底が見受けられた。各考査前に家庭学習における課題を見つけ、今後の展望を見つける取組を実施しているが、まだまだ定着しているとは言い難い。学習意欲の低い生徒、学習成果の上らない生徒が多数おり、引き続き、保護者との連絡も密にとり、きめ細かく指導に当たりたい。
		目的意識を持って授業や部活動に取り組ませる。東稜祭などの取組を通して、互いの個性を尊重して協力し合える集団づくりを目指す。	B	B	
	【第2学年】中核の学年として責任感と自覚を持った高校生活を送らせる。集団としての規律を守り、自主的な活動ができるように指導する。	時間を守る、ルールを守るなど基本的な生活習慣の定着を図る。	B	B	遅刻指導などを通して時間を守る事ができるようになってきた。校則に違反する事は無いが、場面に応じた適切な行動がとれない生徒はまだ多い。来年度の研修旅行に向けて継続的に指導していく必要がある。
		HR活動、学校行事などを通して主体性と協調性を培い、本校の中核としての責任感を養う。	B	B	
	【第3学年】各自の進路希望の実現に向けて、学習・生活・行動等さまざまな場面で責任感をもって行動する習慣を持たせ社会へ出るための心構えをつくり、充実した高校生活を送らせる。	さまざまな場面できめ細やかな面談(2者、3者)を充実させる。	B	B	進路は3年間の総和であるという視点に立ち、生徒が粘り強く進路を獲得していくよう情報提供、面談等を通して指導することができた。制限のある中、行事等を通してクラス、学年の一体感を体験することができた。自らルールを守るよう意識を高く持つことができるようになった。
		行事等を通して生徒が達成感を味わい成長できるような学年全体で一体感をもって「しかけ」を準備する。	B	B	

評価領域	重点目標	具体的方策	評価	成果と課題
国語	生徒の意欲と努力を喚起し、評価する。	生徒の意欲を引き出す課題を提示し、適切に評価する。	B	どの授業においても、導入や授業展開を工夫することで、生徒の意欲を引き出すように努めた。ほとんどの講座で小テストを定期的組織的に実施し、基礎力の定着を図るとともに、適切な評価につなげた。講座の担当者間で情報を共有し、多くの科目で共通テストを実施することができた。
		小テストを定期的組織的に実施し、漢字力や語彙力、古典単語力の定着を図る。	B	
	教員間の連携を深め、共通理解に努める。	生徒の情報共有化し、指導に役立てる。	B	
		教材や進度の打合せを綿密にし、考査の共通化を試み、適切な評価につなげる。	B	
地歴 公民	生徒の興味・関心・学習意欲を喚起させる教科指導・評価法をさらに工夫する。	学習ノートやプリント等の提出により生徒の知識定着度・理解度を日常的に確認する。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習ノートや授業プリントなどを毎回提出させ、知識の定着や内容理解を確認し、評価に反映することができた。</li> <li>・観点別評価に対応する授業内容や教材、考査での出題方法などを工夫し、教科会議を通じて交流することができた。</li> <li>・プロジェクタやタブレットを使用した課題学習を計画することができた。</li> <li>・生徒の学習到達度や進路希望等に応じた教材や授業方法を模索し、試行錯誤することができた。</li> </ul>
		観点別評価に対応する教材や指導方法の交流を推進する。	B	
	自ら積極的に学ぶ力をつけ、発展的な学習をさせる。	視聴覚教材や地図等を利用した体感的な学習、また外部機関との連携を図った授業や課題学習などを展開する。	B	
		クラスの特長や生徒の適性・進路に応じた教材や授業方法を工夫する。	B	
数学	「わかりやすい」「理解できる」授業を実践し、生徒が「やり切る」姿を見届ける。	平常テスト等をこまめにおこない、基礎学力を定着させる。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・到達目標を明らかにし、適宜、補習を行うことで多くの生徒が目標に到達することができた。</li> <li>・定期考査に加えて、平常テストを実施することで、基礎学力の定着を図ることができたが、例年と比較すると回数は減少し、徹底までは至らなかった。</li> </ul>
		到達目標に達していない生徒には、適宜、補充を実施する。	B	
	進路実現に向けた取組を計画的に進める。	進研実力テストなどの事前指導、事後指導を充実させる。	B	
		進路希望に沿った長期休業中補習・平常補習を充実させる。	B	
理科	日々の授業の学習規律の向上に努め、視聴覚教材の利用、実験の導入など、興味付けを行いながら基礎学力の定着を図る。	授業における指導状況の情報交換に努め、課題の共通理解を図ることで指導に役立てる。ICT機器の積極的な活用(特に実験時)を図る。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導状況や生徒の情報交換を積極的に行うことを心がけ、教科内で一定の情報共有ができた。ICT環境が整いつつあるため、より積極的にICT活用に取り組んでいきたい。</li> <li>・学習の習慣付けに関しては不十分であった。生徒の適性を見極め、アプローチの方法から再考する必要がある。</li> <li>・大学との連携は、教育課程の変化に伴い、対象や講義内容を変更。柔軟に対応できた。生徒からも概ね好評であった。</li> <li>・進路補習は、授業やカリキュラムと関連付けた展開が課題である。生徒の多様な実態にうまく対応していきたい。</li> </ul>
		学習課題、小テスト等を実施し、学習内容の定着及び家庭学習の習慣付けに努める。	C	
	理系の進路指導の助力となるよう、教科の発展的指導に努め、個々の希望に応じた適切な進路学習指導を実施する。	大学との連携事業を計画的に実施し、教科指導、進路指導に役立てる。	B	
		進路補習において、個々の希望に応じ、充実した補習になるように努める。	B	
保健 体育	生涯にわたって健やかな身体を養うための実践力や知識を身につけるとともに、自らの健康を管理し、改善できる資質能力、態度の向上を図る。	健康づくりのための運動の大切さを理解させるとともに体力づくりを実践する。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎時間のトレーニングや持久走を通して体力の向上とともに、生涯を通じた健康づくりへ意識の向上を図ることができた。</li> <li>・新型コロナウイルス感染症予防において、実施種目や実施体制を大きく変更することとなったが、感染予防に努めつつ、個々に応じた運動量を確保できるように努めることができた。</li> <li>・校外へ出向いてのキャリア活動はほぼ実施できなかった。</li> </ul>
		ルールやマナーを守り安全に配慮すること等により、体育の授業をより円滑にそして安全に参加し活動させるための心構えを身につけさせる。	B	
	キャリアコースライフスポーツの講演(講義)や実習の内容をより一層充実させる。	生涯スポーツ、体育特講の各授業内容を工夫し、学年を超えた縦の繋がりの強化を図る。	B	
		外部講師の活用を充実させ、内容の整理を図りながら、より質の高い取組を実施し、専門種目の技術の向上に繋げる。	B	

評価領域	重点目標	具体的方策	評価	成果と課題
芸術	基本的な授業態度を定着させる。	授業規律を確保し、積極的な姿勢・態度を身に付けさせる。	C	どの講座も基本的な授業態度を定着させ、芸術に対する情操感を育むように務めた。しかし、一部の生徒による積極的に授業に参加できていない状況の講座があり、生徒が安心して受講できる環境作りの保障を次年度はさらに徹底したい。
		生徒が安心して、興味を持って受けられる授業展開を図る。	C	
	芸術の表現や鑑賞の視野を広げ、情操感を養う。	自他共に、作品や課題を大切にすることを養う。	B	
		時間をかけて取り組む過程を興味付けさせ、内容を工夫する。	B	
英語	基本的な英語力の定着を図る	セーフティネットを活用し早期に生徒の躓きを把握する。	B	定期考査前を中心にセーフティネット対象生徒の基礎学力充実に努めた。単語小テストや課題提出を計画的、計画的に実施した。どちらも、一定の効果が見られた。
		提出物や小テストを利用し日常的に学力定着を図る。	B	
	英語を通して言語や文化に対する理解を深め、コミュニケーション力を養う。	4技能の統合を目指す取り組みを定期的・継続的に行う。	B	授業では4技能を意識し、英語表現の課題やスピーキングテストを定期的実施した。GTEC 事前指導としてワークブックを活用し、事後にはスコアレポートを利用して生徒の意識向上に努めた。
		GTEC 等検定試験を活用しながら学力の向上を目指す。	B	
家庭	生徒が自分の生活を幅広い視点から見つめ、主体的に生活の充実と向上を図る学びの方向性を示す。	主体的に生きる生活者として不可欠な技術・能力を身につけることを目標に、実験・実習を取り入れる	C	3年サポートクラス保育実習の発表会について検討した。さらに、次年度も調理実習や施設見学・交流実習が実施できない状況が続くことを想定し、代替の教材を工夫する必要がある。
		社会と自分の関わり、家庭生活と自分の関わりを実感し、生徒自身が主体的に考える力を育てる教材を工夫する。	B	
情報	情報を適切に扱い、自ら情報活用能力を評価・改善するための基礎的な知識や考え方を学習させる。	生徒間の相互評価をより一層導入し、関心を持たせる。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>一般的なソフトウェアでの習熟やプログラミングソフトでのプログラミング的思考を養い、生徒間で相互評価を行うなど情報を扱う上での基礎的な技術や姿勢を身につけさせることができた。</li> <li>情報モラルやセキュリティについては2学期に筆記テストを実施し、情報を安全に使用する態度を養った。情報モラルにおいては知識だけでなく、より実践的な内容による指導方法の工夫が必要であると感じる。</li> </ul>
		オフィスソフトを扱うだけでなく、プログラミングソフトなどの新しいソフトウェアを取り扱いながら情報活用能力を高める工夫をする。	B	
	情報や情報技術が果たしている役割や影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任を考える態度を養う。	情報モラルやセキュリティについての考査を実施する。	B	
		最新の情報に関する時事内容や情報技術について授業中に触れ、生徒の興味・関心を引き出す。	B	

**学校関係者評価委員会による評価** コロナ禍の中でもICTを活用した学習保障や感染対策を徹底して実施した学校行事等学校の教育活動を止めない工夫が随所に見られた。基礎学力が不足した生徒への学習指導、進路保障のための取組等によって一定の成果が得られた。本校の柱であるキャリア教育を一層発展させたり、「総合的な探究の時間」を活用して、生徒が主体的に課題を発見し、生徒同士が協働しながら課題解決を図る取組を進める必要がある。

**次年度に向けた改善の方向性** 新学習指導要領に沿った学習指導、評価方法の研究を一層進めて行く必要がある。また「生徒一人一台のコンピュータ（タブレット）」時代に備えてICT機器やデジタル学習支援ツール(Classi)を用いた指導を実践することで課題を明確にし、学校全体で共有し、その解決法を考えていく。